琉球新報　2008年（平成20年）10月29日水曜日

落ち穂

味方

三浦　陽二
（沖縄ダルク・チーフディレクター）

北谷で高校生が…最近よく耳にする。すると講演の依頼が入ってきた。最近でこそ少なくなりましたが？　どうしても予防というと「怖い」「恐ろしい」という脅し路線を思い浮かべる方が多くいらしたように思います。

私の子供のころから、いやもっと前から「怖い」「恐ろしい」「人間やめますか」という予防がされ続け、どうなったかというと薬物の使用者人口が増えて、低年齢化していったのです。ただし、全く効果が無かった訳ではなく、それだけでは足らなかったということだと思います。しかし、この脅しのような予防になれてしまうと、一年に一、二度「怖い」「恐ろしい」と肝に銘じればもう大丈夫！のような錯覚に陥ってしまう人も多いのではないでしょうか。

「覚せい剤うつならホームラン打とう」とか有名な選手を連れて来てこれでもかっとお金を遣ったり。それじゃあマズいだろうと「NOと言う勇気を」と標語も少しずつ進化していました。しかし、ここで思い出されるのは石原都知事著の「NOと言えない日本人」な訳で、どの様にすればどうどうと、キチンと断る事ができるのかを伝えることが大切なのだと思いました。

「わびさび」とか「恥の文化」などいろいろありますが、「アイツ（上司など）の誘い」だからこの飲み会断れないや」と思ったことがある方には分かりやすいと思います。相手との関係性や自分のおかれている立場によっても断りやすい、難いがあるのです。薬を勧められるそのほとんどの場合、知り合いからなのです。

私は断るためには味方が必要だと思っています。それは、「私がクスリを使うと哀しんでくれるだろうな」と思える人が大切な味方なのです。

十人しか友人がいなくて、その内の半分の友人がクスリを使っていたら、仲間外れにならないために断ることがとても困難になるのです。それでは二十人の友人がいればどうでしょうか。半数が使っていたとしても断るのは容易なのです。そして、たくさんの友人をつくるには、何かに所属して、そのなかで役割を持つことが良いのではないかと強く思う今日このごろです。

※「落穂」とは、琉球新報紙の文化面のコラムで、今回は9回目の掲載分です。１０名の執筆陣の中に施設長の三浦も含まれ半年間、計１３回ほどの掲載が予定されています。紙面でご覧頂けない方にも読んで頂きたくニューズレターにて転載していきたいと思いますので、どうぞお付き合い下さい。